

会報「山」600号の足どり

会報「山」は、この5月号をもって600号に達した。昭和5年10月の創刊以来、65年の年月を数える。会報の歩みは日本山岳会の歴史そのものだが、この600号の足どりを望月達夫、織内信彦、岡澤祐吉の3氏に書いていただいた。現編集委員はこれを受けて、会報の将来を考えてみようと思う。

月刊誌の「山」が六〇〇号に達した。毎月刊行されていたら計算上では五十年が経過したことになる。しかし「山」(創刊当時は会報―本稿では便宜上会報として記述する)の創刊は昭和五年(一九三〇)十月であるから、その間実に六十五年の長い歳月の経過があった。その理由は、第一に当初会報は必ずしも月刊を意図したものではなく、年

会報の今昔

望月達夫

十回くらいを目安としたものであったこと(昭和十六年に戦争直前ただ一回年十二回刊行されたことがあるが)。第二に先の大戦の影響で昭和十七年以降、発行回数は減少し、敗戦の年、昭和二十年のごときは一回も発行されなかった、などのことによるのである。戦後、本会再建に伴い、会報もまた復刊されるようになり、月刊誌として年十二回発行が可能となったのは、ようやく昭和四十一年(一九六六)のことであった。なお会報の、とくに戦後の数年間は日本交通公社発売の「山」が一時並行的に刊行されたりして複雑な観があり、後来の研究者に甚だ分かりにくい点が少なくない。それらを考慮して私は、かつて「日本山岳会史覚書」の第二章として「会報について」の一文を草し、分かりやすく示したことがある(『山岳』八〇年三四ページ

以下)。会報の史的経過を調べられる場合は、是非目を通していただきたいと思う。会報は当初からの慣例に従い、五〇号宛合本されて総目録を付し、散佚を防止する一方縮読の便をはかってきたので、既に第一合本から第十一合本まで十一冊が存在するが、六〇〇号完成を機に、また第十二合本が追加されるわけで、その年輪を加えた重みがある内容とともにズシリと感じとられるのである。と同時に、会報に注がれた努力はひとり編集者ばかりでなく、多くの役員、会員の多年にわたる結晶であったことを痛感する。ここで私はあまり細かいことに立ち入るつもりはないが、一、二の点について述べておきたい。本会の諸相(会員数、諸行事、経費規模、国際化等々)が六十五年前と現在とでは計り知れな



1995 年 (平成 7 年)

5 月号 (No.600)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

会報「山」600号の足どり

会報の今昔	1
600号を迎えて	2
324号から577号までの20年	3
これからの会報「山」	4
自然保護随想	5
報告	
山岳図書を語る夕べ	6
新入会員オリエンテーション	6
ビデオ鑑賞会(デオ・ティバ)	7
早春ハイキング	7
マカルー通信	8
東西南北	
秩父宮記念学術賞を受賞して	9
「骨投沢」始末記	9
骨投沢は小繁沢が妥当	10
単身の山(2)	10
ムスタンの旅・続	12
短歌・霧の彼方	13
韓国の山名などについて	13
海外の山	11
図書紹介	14
受入書籍報告・住所変更	15
山と医療(登山と栄養)	16
会務報告	17
会員異動・ルーム日誌	18
INFORMATION	19
創立90周年記念事業募金応募状況	19

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜日	10～20時
水・金曜日	13～20時
▶図書室開室時間	
日曜・祭日・月曜日を除く毎日	13～20時

い相違を来しているもので、それらを反映すべき会報の誌面も当然、往時とは大きく変わってきて然るべきであろう。だが会報が続けられる限りは、五〇号毎に総目録がつけられて合本される形を、また内容の面では編集者が時には早期、中期の古い会報に目を注がれ、その時代時代の会報のありようを了知され、できるだけ格調の高い会報「山」の刊行に心がけられることを期待してやまない。

言うまでもなく会報は『山岳』とともに本会の定期刊行物としては最も重要な二本の柱である。両者の編集者がよく連繫され、従来同様に会員各位が進んで協力されることを望みたいのである。

付記

「山」(会報)の編集者について

「山」五〇〇号五ページ下段には歴代の編集者氏名が明記されていて便利であるが(作成者・児玉茂氏)、一三七、一五〇号は不詳となっており、その他にも補正を要する点が少しあるので、この機会にそれらを明らかにしておきたい。

この期間は先の大戦中およびその後に当たって、当時の奥付を見て

も編集者の氏名の記載を欠いている。合本でいえば第三冊目に当たり、その総目録は田辺主計氏と私が作成したと記憶しているが、その末尾に列記されている編集者氏名は、第一合本以来の慣例にならって号数別ではなく年代別になっているため、号数別に当てはめた場合分かりにくいところがなくもない。それを号数別に解説してみると次のとおりである。

一〇一〜一〇七号 塚本繁松・望月達夫、一〇八〜一〇九号 塚本、一三七、一三九号 塚本、一四〇号(塚本氏は昭和二十二年六月二十五日チブスのため急逝し、同年九月十日発行の一四〇号に松方三郎氏筆と想像される短い追悼文が載っている)、本号は塚本氏の編集ではあり得ない。発行日は昭和二十二年九月十日とあるので私が復員する前である。したがってこれは想像の域を出ないが、当時本会再建に尽力していた理事の誰か、垣内正彦氏か谷口現吉氏あたりが編じたものと思う、一四一〜一四五号 望月、一四六〜一四八号 望月・原全教、一四九〜一五〇号 望月である。なお総目録によると昭和二十四年の編集者に谷口現吉氏の名が見られるが、同年中に発行されたのは一四三〜一四八号であり、そのいずれが同氏によるのか、全体に関っていたのか、あまり古いことで私の記憶にも

残っていない。

また第五合本二〇一〜二五〇号、第六合本二五一〜三〇〇号、第七合本三〇一〜三五〇号の三冊は、その総目録に編集者の記載がない。第八合本からはそれが再び明記されていて便宜である(編集者は大森久雄氏の時代)。この方法は今後とも踏襲していただきたい。

六〇〇号を迎えて

織内信彦

会報「山」が六〇〇号を迎える。五〇〇号の時にも何か書かされたのがつい先頃のような気がしていたので、随分早いものだなあという実感を味わっている。何はともあれ関係者の皆さんご苦労様と言いたい。

戦時末期の昭和十九年九月から途絶えていた会報が、塚本繁松さんらの努力により、終戦後一年足らずで早くも復刊した。概ね戦前の会報の体裁に近

いかたちで刊行されたのは、日本中至るところ荒廃していたあの時期によくやったものだと思うし、会員としての私も旱天に恵まれた慈雨の如き感をもつて、むさばり読んだ記憶が残っている。

誌名が「山」となり、サブネームに「日本山岳会会報」とあったのは、用紙配給を受ける関係からのやむを得ない苦心の跡であろう。しかしその後またある思惑から「山」の発行が他の出版社に委ねられるような経過となったが、思惑は意外に早く外れてしまい、たしか二年半あまりの後、再び日本山岳会の手により「会報」の名で発行されるようになるのは、人ささまの受け取り方はあろうけれども、私などはあよかった、とひそかに喜んでいたので。

その後、短い期間であったが、会報の編集を引き受けた私は、会報創刊の原点にできるだけ戻したいという考え方でその衝に当たった。活字のポイント、行間のあけ方、レイアウト、主要原稿の執筆者の選定、カットのあしらい方などに未経験ながらいろいろと気を遣った。日展所属の上田哲農氏、創元会の川喜田壮太郎氏らに昵懇の間柄をよいことに何枚か描いてもらい、おなじみ佐藤久一朗氏のカットなどと共に要所要所に飾って、誌面に潤いとゆ

とりをもたせることに気を配ったのみならず、図書紹介のページには、創刊以来のなからそれにふさわしいこれはという重厚感のあるものを探し出して使ったが、いま見直してみてもいいカットだったと思う。しかし誰の作によるものだったか覚えていない。

編集の仕事をやられたお陰で、著名な会員と手紙や葉書のやりとりをしたことは言うまでもない。その葉書などの二、三が今でも手元に残っているのは思いがけない記念品である。ヘルヴェチアヒュッテ建設の中心だった北大の山崎春雄教授、極地研究者でまた戦前の山岳雑誌「ケルン」を主宰していた加納一郎氏からなど、今日では珍しいものの一つと言ってよいだろう。短い文面の葉書だが桑原武夫氏からの残っている。

私の次は渡辺公平氏、山崎安治氏と続き、そして古沢肇氏へと引き継がれることになる。古沢氏は昭和五十三年に退会され、それ以来顔を合わせることもなく過ぎていくけれども、氏の編集ぶりは非常に几帳面というか、丹念というか、おそらく大変な時間を会報編集のために費やしてくれたのだと思う。

依頼原稿と言えたい長老級の会員にお願いすることが多いから、そういう方々からのものが入稿すると、

編集に必要な記号の朱筆を原稿に入れることを避けるため、全文を氏の手で筆写した。今日なら複写機があるから何でもないようなものの、一字一句、句読点、改行、すべて原稿そのままに書き写し、それに記号の朱筆を入れて印刷所へ送る、そういう丁寧な手順でやっていた人である。したがって原稿は汚損されず生のままの署名入りで手元に残るわけである。

たとえば、山川黙、高野鷹蔵、鳥山梯成、中村清太郎、武田久吉、辻村太郎、石田吟松、冠松次郎の各氏、その他数点で、これらのものは、会の資料としてもいまになってみれば稀観の類に入るべき文書と言ってよいけれどもその原稿を会で保存するように求めている古沢氏の意図が無視されたため、大部分を氏自身のところへ回収してしまった。大部分というのは、氏の言葉借りれば、とくに目玉と言ってもよい冠松次郎氏が百瀬慎太郎氏について書いたもの、もう一つは石田吟松氏がウエストンと有明山に登った思い出の二点の所在が不明確なままになっていたのである。松本のアルプス山岳館にあるのではないかというので関係者が調べているらしいが、現時点では確認されていない。会報についての憶い出や感想は尽きない。今回はこの辺りでとどめておく。

三三四号から 五七七号までの 二十年(一九七二―一九九三)

岡澤祐吉

「山」三三四号(三三四号(一九七二年六月)―七三年四月)は坂下心一理事が会報編集の担当で、最初の三三四号のトップ記事には、日本山岳会エベレスト登山隊に授与された秩父宮記念学術賞の受賞式で、秩父宮妃殿下が述べられたお言葉が載り、次の三三二五号には上高地山岳研究所の建築資金募金の記事が載っている。このころでも、日本各地の登山隊が遠征した海外の山の登山報告がときどき載っているが、主なところは『山岳』に掲載されている。

このようななかでも、三三〇号のUIAA総会報告に見るように、マナスル南西壁を経て単独登頂を果たしたラインホルト・メスナーのことが載っていたりして、その時は目立たなくとも後になって脚光を浴びるような人とか事柄の記録されているものがある。坂下氏は退任のさい「あとがき」で

「……近年、高所登攀の研究や自然保護運動とともに、本会の歴史発掘の動きが会員の中に広がりつつあるように思う……」として、それ以降の会の方向を示唆している。

春田俊郎理事が編集を担当したのは三三五―三四〇号(一九七三年九月まで)で、今西錦司会長が選出された総会記事と、ルームが湯島のさくらビルに移った記事が最初に扱われている。

「山岳」図書を語る夕べ」は「含蓄のある内容なので」トップ記事とした等、記事の配列もその中身を吟味し、機械的に処理しないといった姿勢を見せたが、本業多忙で四か月で任を降り、初心を完遂することができなかった。わずく四か月ではあったが、その間に、信濃支部のアンナプルナ登山隊のアクシデントが起きている。

三四一―三五八号(一九七五年四月まで)は山崎安治評議員が春田理事の任期終了まで編集代表となった。小倉厚氏はその下で、理事にならないまま編集を手伝った。

小島烏水・木暮理太郎・岡野金次郎の生誕百年展が東京日本橋の丸善で行われ、『山岳』の復刻版や、山岳書の復刻が盛んとなり、登山における、文化的な面がクローズアップされた。

山の世界の変化も、スピードを増した。海外登山の記事は、会員通信欄で

しか会報では目にしなくなった。女性隊のマナスル登山やエベレストへの挑戦も、RCCⅡエベレスト南壁登攀と同様、JACが直接かわわっていなかったせいもあり、会員が関係している範囲で記事になるだけだった。

そんななかでナンダ・デヴィの遠征計画が久々に会報のトップ記事を飾り、エベレストが終わって放心状態だったJACにやっと活力が戻った。

大森久雄理事が編集を担当したのは三六〇〜四〇七号（一九七九年五月まで）。山岳書の編集を長く務めたプロが「山」の編集を手がけたことで、会報はある種の香りを取り戻した。

マスメディアの面でも確かな眼識をお持ちだった松方三郎・元会長の姿勢には美意識というものがあつた。それが欠けては人間として失格だろう。

会員通信として送られてきたナンダ・デヴィとか、女性隊のカメット登山さらにジャーヌのような一般会員からのものも、隅に追いやらず二面で扱うよう配慮は行き届いた。三六三号の「東海道線の車窓から見える南アルプス」（石間信夫会員）など、はつきりと読む側に立った編集が目につく。

私が担当したのは四〇八〜五二八号（一九八九年六月まで）のうち、皆川完一理事が担当した四五六〜四六五号を除いた期間の足掛け九年三か月。本会

の伝統ある山日記の編集を手がけた皆川氏が仕事の都合で短期間で退かれたのは残念だった。

私が担当した約十年の間にチョモランマ、キシュトワール、ボゴダ、三合同登山と、本会が主体となった登山があり、一九八八年には皇太子殿下の入会といった登山という行為以外の出来事も多かった。海外の山における情報も、その道のプロによる外電からの情報提供があり、個人会員からの情報提供の不足を補った。

小倉厚理事が編集を担当したのは、五二九〜五七七号（一九九三年六月まで）。ナムチャバルワ登山があり、西堀榮三郎・榎有恒・今西錦司といった本会を担った名誉会員が次々と亡くなり、そして、新しい上高地山岳研究所の建物が竣工した。自然保護の問題についても日本山岳会の姿勢を示す集会があったりと、会報「山」の記事が日本山岳会のそのときの姿を示すものであることは昔も今も変わりが無い。

「山へ登りさえすれば満足だというのは、高みへのぼるバカや煙と同じレベルであり、そこから何を体得できる素質があるか、より深く人間性を極めたいのくに登山がどれほどの役割を持ち得るのか、という点まで考えなければ」とえ日本山岳会員が世界じゅうの山へ陸続と出張したところで、内容はバ

カ並みであり、社会へはなんの価値あるものも還元されないことになる」（西丸震哉会員・「山」三一十九号より）は、これからも「山」が保つべき姿勢を示しているといえるだろう。

これからの

会報「山」

よりよい会報をめざして

伊藤 徹

会報の分厚い合本のページを繰ってみると、会報の体裁や紙面構成が少しずつではあるが変わってきていて、その時々々の編集者の苦心の跡がしのばれる。筆者ら現編集委員が担当するようになったのは、五七八号（平成五年七月号）からだ。編集のあり方については、諸先輩同様それなりに思いを巡らしているところである。会報の将来といっても、特別にビジョンがあるわけではないが「会報をよくするため」に考えていることを少し書いてみたい。

会報が月刊となったのは二四七号（昭和四十一年一月号）からで、毎号

のページ数は十二ないし二十ページであった。月刊のほかに「臨時増刊」を出すことは、今のところ考えていないが、毎号のページ数は今後ふやしていきたいと思う。十六・二十ページでは各六回ずつであったが、平成六年度からは二十ページだてを年八回にふやしている。増ページは編集者にとって負担増となりづらいことだが、「東西南北」欄に寄せられる会員の原稿もたまりがちだし、今後は毎号二十ページだてとし、さらに二十四ページだても入れたい。

会報の体裁のことだが、会報を手にしたときの「感じ」を大切に考えたい。創刊号に見るような「格調の高さ」を保ちながら、この種の機関誌にありがちな「固さ」をとり、親しみやすい紙面構成につとめる必要がある。現行の四段組み・一段三十一行が採用されたのは五二二号（昭和六十三年二月号）からで、従来の五段組み・三十六行に比べると、字が大きくなり、ずっと読みやすくなった。これは今後とも踏襲されよう。

筆者らの初仕事は五七八号だが、この号から全ページの囲み罫（枠）が外されている。この囲み罫は創刊以来のもの、これを取るのはいかなる思い切ったことだったが、結果は紙面に「伸びやかさ」を与えたと思っている。ま

た一ページの目次欄を四段目まで下げたことによって、誌名「山」の字との間に「ゆとり」が得られている。カットの配置など細かいところまで気を配りたい。紙面構成に写真の果たす役割は大きい。従来は各号に二、三枚にすぎなかった。現在は数枚から十枚程度を掲載しているが、まだふやす余地はある。将来はカラー写真も登場するようになる。

体裁も大事だが、さらに重要なのは記事の内容である。「支部だより」を設けたのは五七九号からで、従来「報告」欄で扱われていたものを独立させたものである。全国組織である会の円滑な運営に資するためにも、支部からの情報を重視したい。「報告」欄の主体は各委員会報告だが、各種のシンポジウムなど、一般会員にとっても有益な内容のものは、できるだけ十分なスペースをとって、トップ記事としたい。先月号のシンポジウム報告「登山と疲労」はこのような趣旨によるものである。会員の寄稿による「東西南北」は最もよく読まれている。できるだけ多くの会員の投稿を掲載したいということから字数に制限を設けているが、今後は増ページをはかるとともに、制限もゆるめたい。

最後に「編集体制」について触れておきたい。筆者の前々任の岡澤祐吉さん、前任の小倉厚さんは、一人で原稿の整理から割り付け、校正までやっておられたようだが、これでは荷が重過ぎる。会報五〇〇号（昭和六十二年二月号）掲載の座談会の中で、岡澤さんは「事務局体制の確立」（事務局の中に会報の編集室を置く）を提言されている。ひとりの力だけに頼るのは限界がある、ということだ。

筆者らの編集体制は、委員数八名だが、それぞれに機能分担がされていて無駄はない。実際の編集業務は筆者と奈良原・小倉重子委員が行っているが、レイアウトのプロ級の腕前の奈良原委員の存在は極めて大きい。さらに悩みのタネの校正について、専門家に入ってもらったこととしているが、このような体制は今後も望ましいと考えている。岡澤さんの提言はこの体制を事務局の中に置くということのようだが、個人の手作業による編集は限界があり、よりよい会報の発行を続けてゆくために、考えるべき問題と思う。

終わりに、松方三郎さんが「会報二五〇号に思う」（昭和四十一年四月号）で述べられている言葉を紹介したい。「いくら金がかかっても、会報発行は何としてでも続けて行くべきと考えるクラブとしてのJACにとって、会報は何にもまして大きな役割を果たしているからだ」。

自然保護随想

山の保護と国際協力

太田新生

都会の変貌は著しいが、山道の変り方もひどい。ちょっと行かないうちに、林道が、送電線鉄塔が、ゴルフ場が忽然と現出して、静寂の山道が無残に消されてしまう。しかしそれをただ嘆くのは、勝手過ぎるかもしれない。

「経済大国」にはインフラが、「生活大国」にはレジャーが、「優しい政治」には過疎対策が必要であろう。ただこれらは必ず自然破壊を伴う。問題は、その破壊が、地球の将来、未来の子孫が生き残るために、許される範囲なのか、どうかであるが、それを判定することは、至難の技である。しかし現代人の要求と、未来の地球環境との調和は、まさに政治に求められている大問題である。

現実の問題として考えるとき、こんな林道が何の役に立つのか、プレイヤーの姿も見えないゴルフ場が必要なのだろうか、送電は必要だが、

山肌をこんなに壊さないでもすむのじゃないかなどと考えてしまう。

さらには、その背後に「地元の有力量」とか「票」とか、果ては「永田町論理」までが、ちらついてくるのは不幸なことだ。

ともあれ、地球は限られている。

「自然保護」などの言い方は、我々の生命がもともと自然の育みのおかげなのだから人間増長の反映という気がするのだが、こうなってしまうてはせめて不必要・過剰な自然破壊は絶対に阻止しなければならない。

JACは、山を愛し、自然を愛し当然「自然保護」を強く願う人の集まりである。といって、ただ「絶対反対」を一方的に呼号するような振る舞いはJACにふさわしくない。具体的問題が出た場合、地元が求めるものと、必要な保護との調和、これはまさに政治の役割だが、不必要・過剰な破壊を阻止するためのコンセンサス作りに寄与する、そんな社会的役割を果たせないものか。

また「地球サミット」を待つまでもなく、地球、この緑の惑星を守る努力は、全地球人の義務である。JACは優れた諸先輩に続いて「山」を通じて国際協力にも力を入れるべきであろう。

第二十六回山岳圖書を語る夕べ

—島田巽さん・山のこころ

図書委員会

今回は、島田巽さんの一周忌前夜にあたる三月七日の春宵、近藤信行さんに「島田巽さん・山のこころ」と題してお話いただいた。島田家からは順子未亡人、および次男の和男、基子夫妻が出席された。

大橋晋委員長の挨拶のあと、近藤さんの講演は『ふだん着の英国』『山・人・本』『山稜の読書家』など、島田さんの著書からそれぞれ具体的に文章を紹介しつつ、ジャーナリストという職業の傍ら山をこよなく愛し、モラリストでもあった島田さんを語る、というスタイルで進められた。次に講演要旨の一部を示す。

島田さんの生い立ちとはといえば、普段よく神戸一中の話をされたので、てっきり神戸で生まれ育ったものと思われていたのだが、あるとき山岳会の帰り道、赤坂見附の方へ向かって歩いてみると、島田さんはこの付近で生まれ



島田巽さんの著作と人柄を語る近藤信行氏（中央）

たとおっしゃった。

また島田さんの父上の家系が、恐らく佐倉藩かあるいは木更津藩かのご出身と想像しうるなどから、学問の家、武士の気風に富んだ家の血を引きながら実業界にたずさわっておられた父上の下で、東京および開港地神戸の両方で育まれた島田さんは、自ずと日本的な士族の気風と西洋的な文化とを身につけられたに違いない。

『山・人・本』の前半部分には、大正末期から昭和十二、三年ごろにかけての自伝的な文章が収められている。

大正十二年、山への情熱をかきたてる要因となった横有恒『山行』や『登高行』との出会い。昭和五年、日本山岳会へ入会を勧めてくれた藤島敏男さんとの邂逅。またこの年の前後は、今では古典の部類に入る数々の山岳名著刊行の時期でもあったこと。そして昭和十年、丸善での日本山岳会三十周年記念事業「山岳図書展覧会」を手伝いながらの、松方三郎、小島烏水、木暮理太郎ら諸先輩との交流等々……。若き日の島田さんは、昭和初期の、「山の文化を考える時代」という充実に、良い本、良い人に出会い、クラブライフを楽しむと同時に、日本山岳会の伝統を正確に受け継いで、そして我々にそれを伝えてくださった。

ほかに、ジャーナリストとして昭和二十六、七年に十七か国をまわり、その見聞を素材にしたエッセイ集『ふだん着の英国』から『英国人の七つの癖』や同業の新聞記者ジュームズ・モリスにまつわる「エベレスト登頂のニュース」、『山稜の読書家』からは、伊豆山鳴沢の谷崎潤一郎邸の訪問記とその後に雷の直撃のごときショックを受けたという「雪後庵の傘」などの文章、エベレスト文献紹介の業績等々にも具

体的に触れながら、深い審美眼を有する一方でユーモアのセンスをも持った文筆家島田巽の検証が試みられた。

講演後の懇談会では、島田家持参の日本酒をいただきながら、島田さんの薫陶を受けた「後輩たち」ではなく、「若き友人たち」からそれぞれ思い出のエピソードが披露された。

参会者二十九名。

(小川益男)

第二十一回新入会員

オリエンテーション開催

集会委員会

三月十八日、第二十一回新入会員のためのオリエンテーションが本会ルームで開催された。今回の対象者は昨年二月から今年一月までの入会者二百四十八名で、当日は大阪、京都、金沢、富山など遠方からの会員も含め、三十一名の参加があった。

中村副会長の歓迎のことば、中川総務・集会担当理事から本会の組織と活動についての説明があり、参加者全員で記念撮影をした。このフィルムをすぐに近くのD.P.店に持ち込み、2Lサイズのもの散会時に手渡された。

記念講演は中村副会長が行い、昨年一年間に登った欧州や台湾などの山のスライドを映しながら、「登山は自由



本会ルームのビルをバックに記念撮影の新入会員

な行為だが、遭難の回避など責任を伴う。責任を果たした上で、仲間と自由なよい山行をしていただきたい」と語った。

参加者の自己紹介と意見交換、質疑応答などがあり、前年度入会者の同期会結成にならって、今年度も同期会を作ろうとの呼びかけが行われた。その最初の集まりとして、四月九日の丹沢山麓ハイキングの計画が披露された。引き続きサンドイッチと軽い飲み物

での懇親パーティーに移り、交流・交友を深めた。
(吉川隆士)

ビデオ鑑賞会

昭和三十年代の「デオ・ティバ登頂」を観る

二火会

二火会では、三月十四日、本会のルームにおいてビデオ鑑賞会を開いた。

昭和三十五年、女性だけでインドヒマラヤのデオ・ティバ(六〇〇一メートル)へ登頂した日本山岳会女性会員(細川沙多子隊長以下、浜中慶子、岡部みち子、原欣子、奥川雪江、杉浦耀子の各隊員)の記録がハミリで撮られたもので、資料委員会に保存されていたビデオテープを借用した。

撮影は岡部隊員で、多少の画質の劣化は否めないものの、ゆったりとしたカメラワークは、ヒマラヤの山々の雄大さを十分に伝えるものであった。上映時間四十分

当日は、岡部さん、穴田(旧姓奥川)さん、神戸からわざわざ宗實(旧姓浜中)さんも出席くださり、画面を見ながら説明して下さった。参加者からそのつど質問も大いに出て、「テントの材質は?」「ビニロン」「ザイルは?」「ナイロン」等、登頂のシーンになる

と、思わず拍手がわきおこる。

昭和三十年代、遠いヒマラヤの高峰に夢を馳せ、今では予想もできない長い船旅やキャラバンの苦労を経て、見事に、登頂までした先輩たちの熱意に感動を覚えた一刻だった。

(染谷美佐子)

早春ハイキング

数馬・山崎屋の会

自然保護委員会

早春の奥多摩に待望の雪が降り、泊まりがけ山行の声が上がって、三月十一日、多摩秋川上流の数馬・山崎屋で懇談の会を持った。東京の奥でありながら信州の錯覚を感じさせるといふ田部重治氏の「数馬の一夜」の麗筆で知られた山崎屋で歓談した。

浅間尾根を登る組と数馬直行組との二組に分れて出発した。尾根組は五日市を九時四十二分のバスに乗る。優美な溪谷沿いの道をひた走り、上川苔に十時半に着く。ここから浅間尾根まで市川、小倉ら四名が登った。ゆるやかだが静かな径は関東ふれあいの道であり、落ち葉の感触が足の裏にしみる。浅間休憩所に十二時に着いて昼食。

一時間に出発。人里峠までの北面は雪が深くなる。大岳・御前・七ツ石・

雲取の眺望を楽しむこの道は、石仏の道として荷馬の通る歴史の道(甲州中道)であった。一本松を経て数馬下から山崎屋に三時十五分に着く。

夕方六時から数馬直行組や西原峠にいった人たちを含めて、十六名で数馬の一夜を過ごした。

山岳会における自然保護のあり方、担当理事や委員長など具体案も出て、山奥とは思えない真面目なコンパであった。組織的な話はいずれ出てくるであろうが、山を愛することでは人後に落ちない方々なので、多少の意見の相違はあっても公約数を大切にすることが大切だと思う。

翌十二日も快晴が続く、十名で再び浅間尾根に登る。バスで人里に八時半に着き、急坂を昨日通った人里峠を経て浅間嶺に至れば、富士は霞んでいるが雪化粧した笹尾根は墨絵の美しさである。群馬の登山パーティーも来ている、奥多摩の姿に感銘したとのこと。幅広いハイキングの時代である。滑りやすい雪道を下り、時坂奥の一軒家をへて福寿草の満開に驚き、拂沢の流を見た後、一時にバス停に着く。本宿のたちばな屋のラーメンは美味で幸福な二日間の山行を締めくくり、二時四十分五日市発で早く帰ることができた。山のゴミが目立たなかったことも嬉しい。

(木名瀬亘)

MAKALU・MAKALU・MAKALU・MAKALU

マカルー通信・5

3月12日 ニェラム

1. 偵察隊報告

本年は1988年以来の大雪で、先日、事務局宛に報告したように、あちらこちらで道路閉鎖。偵察隊、本隊とも予定より1週間程度遅れている。

2. 今後の行動予定

①ニェラム滞在の偵察隊は本隊を待たず先発隊として13日出発し、シガール、ユバを経て3月23日BC到着の予定で行動。

②先発隊はラサデポおよび北京経由で持ち込んだ隊荷をBCまで輸送。

③先発隊の食糧は全て現地食としシガールで調達、燃料は石油を使用。

④先発隊はチュダンでBCまで入る隊と本隊を受け入れる隊に2分する。

3. 本隊の行動

①3月20日ニェラム集結を目的にストレートにシガール経由でチュダンに入る(ニェラムにジープ4台、トラック3台が待機)。

②20日以降、時間がかかるようならポーターを使用してザンムー〜ニェラムの輸送を考える。この場合、人員、隊荷の移動はジープ、トラック単位で優先物資を運ぶ。

③本隊は3隊に分割し、燃料はプロパンを用いる。

マカルー通信・6

3月16日 ザーシャン

1. 先発隊の行動は予定どおり

3/13 ニェラム〜シガール。

14 シガール滞在 現地食購入他。

15 シガール〜ザーシャン。

16 ザーシャン滞在 隊荷再梱包。

17 ザーシャン〜曲当(チュダン)ジープ、トラックにて。

明17日までは予定どおり進みそうだが、それ以降はヤクがどこまで使用できるか(現在のところチュダン〜ユバ)また、民工を使う場合どのくらい集めることができるか分からない。

昨15日、アルパイン・ツアー隊(中央大OB隊)にショウラで会ったが、チョモランマBCも雪が多く途中でしか入れなかったとのこと。いずれも雪で苦労している。先発隊は3月18日、再び2分しA隊は好天を得てベースキ

ャンプ予定地へ到達したいと考える。

なお、インマルサットは3月末頃より開局予定。3月17日、曲当に先発隊のジープ2台とトラックが到着。

マカルー通信・7

4月2日 ベースキャンプ

早いもので先発隊は日本を発ってから47日目の夜を迎えている。相変わらず深い雪に悩まされて、予定が10日〜2週間近く遅れている。

1. 行動予定

3/18: 重廣、山本(宗)、竹内、ルーシン…チュダン(曲当)出発。

20: ロブより荷揚げ開始。

23: キャラバン開始。

239: 標高3960mのBC予定地到着。

4/2: 山本(宗)、田辺、松原、竹内…東稜5128mに到達。

2. 4月2日現在の人員配置

・北ショー湖(4650m): 渡邊、小野、岡本、志賀Dr、張江援

・ショウラ(4890m): 谷川、シェルパ2名

・リンブー(ザブンベ)(4250m): 田久和

・ラッカ(ラプカ)(3735m): 荒井、シェルパ2名。

・大本営(3960m): 重廣、山本(宗)、山本(篤)、馬場、田辺、松原、竹内、パルテンバ、シェルパ10名

3. 今後の予定

4/3 仮開村式…BCは1.2mの雪の上。

5 C1建設予定(4660m)雪の上。

9 C2建設予定(5150m)東稜に

くい込むマラク、チューの沢の中。

*隊員は全員元気です。荷揚げキャラバンは4月中旬まで細く長く続く予定。インマルサットの開設は4月中旬。気象協会の奥山さんへ連絡をお願いします。

マカルー通信・8

4月12日 ベースキャンプ

登山隊は入山には大変苦労させられて(深雪のため)先発隊が3月30日にベースキャンプ予定地(3960m)に到達、その後隊荷の移動とともに隊員、シェルパが順次ベースキャンプ入りをし、昨日(4月11日)最後の渡邊隊員、張江援連絡官がベースキャンプに到着

し、全員がそろった。本日ベースキャンプ開きを行い、明日より本格的な登山を開始。

もちろん先発隊は4月1日からベースキャンプ以上のルート作業を開始し、4月1日C1予定地、2日C2予定地に到達。7日にC2を建設、10日までにC3予定地(5780m)へのルート作業と荷揚げを行っている。

明13日よりほぼ全部の隊員とシェルパが上部への行動を開始し、14日C3建設、22日C4建設。C5へのルート作業も4月末までに行いたい。

大部分の隊荷がこの3日間で到着し、インマルサット開設。ベースキャンプの整備後、連絡時間など報告します。

天候は午前中晴、午後雪というのが毎日の繰り返しで、何とか行動できる程度、3月30日の入山以来ベースキャンプで約30cmの融雪を見たが、テントはまだ100cmの雪の上です。

マカルー通信・9

4月18日 ベースキャンプ

1. 登山報告

4月13日より第2期を開始、14日C3(5660m)建設。この期にC5の建設とC6までのルートを開通したい。

A隊: C3建設、C4のルート工作、C4の建設、C6のルート工作…山本(宗)、谷川、荒井。

B隊: C3荷揚げ、C4荷揚げ、C5荷揚げ…田辺、馬場、松原。

C隊: B隊に同じ…山本(篤)、小野、竹内。

D隊: C3荷揚げ、C4荷揚げ…渡邊、岡本。

以上の予定であったが13日岡本、15日竹内が体調を崩してBCへ下山。岡本は扁桃腺炎、竹内は風邪によるもので、18日現在ベースキャンプで加療中。17日、渡邊、山本(篤)がD隊としてC2入り。同日シェルパ5名ずつがC1とC2に入り、18日から荷揚げ。

18日、田辺、馬場、松原、小野がC4へのルート工作、A隊の通過したルートは雪崩の危険性があり、稜線のルートに変更の予定。今のところ天気はよいので何とか少しでもルートを延ばしたいと思う。

BCにて マカルー登山隊 重廣恒夫

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜七枚以内をお願いします)



秩父宮記念学術賞を受賞して

鳥居 亮・森 武昭

会報四月号で高田眞哉氏から速報していたように、筆者らと木村茂雄氏(非会員)の三名で構成する神奈川工科大学自然エネルギー利用研究グループは、このたび日本学術振興会が制定する平成六年度秩父宮記念学術賞を



受賞した。

この賞は、本会名誉会員であった故秩父宮殿下がわが国の学術振興のために多大の尽力をされたご事績を記念して制定された賞である。そして、殿下がとくに山に関して経験豊かで造詣深かったことにかんがみ、「山」に関係した科学で顕著な研究業績をあげた個人またはグループを対象として、毎年一件授与されている。

我々の研究グループは、昭和五十七年から北アルプス穂高岳山荘での風力発電の実験を皮切りに、数多くの山小屋で風力・太陽光・超ミニ水力といった自然エネルギー利用発電の実用化試験や技術支援・助言などを行って、多くの成果を上げてきている。

現在、自然エネルギーを利用した発電を行っている山小屋は、国内で百十二か所となっており、荷揚げ量の軽減

ばかりでなく、排気ガスや排出物を出さない、環境に優しい山小屋の実現に寄与している。また、このような成果を生かして、ヒマラヤなどの海外登山隊や南極観測拠点での実用化にもいろいろな形で貢献してきた。今回の受賞は、これらの業績を評価していただいたもので、本会のほかに、日本山岳協会、日本太陽エネルギー学会、日本風力エネルギー協会の四学会・協会から推薦していただいた。

三月十五日の授賞式については、四月号で紹介済みなので省略する。なお、式典終了後、祝賀パーティーが催された。会場では、業績に関係した展示品(太陽電池モジュール、超ミニ水力発電装置、南極で稼働した風力発電装置のプロペラ)や多数の写真を展示し、妃殿下や文部政務次官など出席者へ筆者らが説明するとともに多くの質問にお答えした。

また、明るる十六日には、受賞者三名と本会中村副会長や関係団体の代表が秩父宮邸での午餐会に招かれた。本研究に関する話から始まって、登山一般、秩父宮殿下の想い出、最近の妃殿下の様子などいろいろなことが話題になり、和やかな雰囲気の中で楽しい一時を過ごすことができた。

筆者らは、この受賞を励みに、これから本研究テーマを通して、環境に

優しい自然エネルギーの実用化にいつそう努力していきたいと思っています。最後に、お世話になりました本会の関係各位に深甚な謝意を表します。

「骨投沢」始末記

佐藤芝明

会報五九四号の「魚沼駒ヶ岳とオオカミ」で小生の独断で、骨投沢の由来を書きました。小生は少しく「山の神信仰や風習とオオカミ」に関心を持ち、とくに日本オオカミ生存説を信奉する者です。山の神とオオカミの件に加えて、仕事で地方にも出かけることが多く、約八百市町村くらい歩きました。必然的に地名・小字に関心を持つようになりましたが、各地の古文書・地誌の類いについては、教養不足である上、本態性高血圧というべき個性特性から血圧上昇を来すため、ほとんど読んだことがありません。このため「小字」・沢の名称については由来を独断で描いて楽しむ者です。

「地名由来」には意外と土地の人々にタブーとされることが背後にあります。大先輩である川崎精雄先生や越後支部長である佐藤一栄先生のご指南をいただき、誠にありがたく、ただ恐縮するばかりです。今回の骨投沢(ホネナ

ゲ沢・小生の読み方)についても古文書・紀行文を全く読むことなく独断で書いたものです。

動物の骨(ホネ)、ホネヤスメなど古来平民の話し言葉にひかれて骨(ホネ)としましたが、丹沢の山家の流れを汲むという人は、「骨」コツをぶつ返す」即ち寝ることを指していました。ここでふれる骨の読み方もコツと読むほうが正しいかも知れません。

さて、手元にある「越後山岳」の復刻版の第壹号・創刊号に「秘境銀山平」と題して、青山五郎先生(日本山岳会・長岡山岳会)が骨投沢について書かれています。(注)

「越後側からの関門である枝折峠直下にある骨投澤の口碑もそれに絡み中々興味深い、この傳説は各種の説はあるが當時銀山平に働く者が死亡した時その遺骨を持って枝折峠を越え郷里へ出るのを悪用して銀の密移出を計る者があった。(中略)奉行は骨は銀山平に埋めて祭ることを入山者全部に誓約させた(中略)死者の親戚知友はせめて一握りの骨灰でも故郷に届けてやろうとそと持ち出す途中名主や役人に発見され泣く泣く枝折峠直下の溪谷に投棄で、銀山へ追ひ返されるのである」とあり、また、川崎精雄先生の記事もこの後に続いている。骨投沢の位置を把握していただくために青山先生の文

書を圧縮して概略を書いてみます。

大湯側から「つなぎ場」を拾うと、一合目坂本(坂道の入口)、二合目・めざまし(小出を夜半に出発すると夜明けとなる)、三合目檜の木、四合目水間(スイカン)、五合目半分石、六合目中の水、七合目仙壹櫃、八合目葡萄、九合目日本坂、明神峠、枝折峠となる。銀山平へは九合目問屋場、八合目水場、七合目焼山、六合目樺坂、五合目追分、四合目大曲り(骨投沢が俯瞰できる)、三合目下十、二合目榛ノ木、一合目石抱橋である。登り三時間、下り一時間。

さて、小生の独断の記事が地元の人々のタブー(一般登山者に敢えて知らせる必要のないこと)にふれたことになりかねないことを、深く反省していますが、今回のオオカミの吠声に関してアドバイスやご協力などをいただければ幸いです。

注・青山先生の原古文書は、銀山平の元禄年間の奉行である依田某の身内であった松田喜治右衛門の手記によるとあります。昭和二十二年十一月五日記。

骨投沢は小繫沢が妥当

川崎精雄

会報五九八号の佐藤一栄氏の文を拝

見したので一筆。私も骨投げ説など全然信ぜず小繫沢と思っています。あの文は聞いたところを紹介しただけで、「そんな原始的かつ静寂な場所だったから、前述のような話が尤もらしく聴けたのである」と書いています。

コツナギ沢はほかにもあるはずですが、今思い出せません。わかったら本欄に載せましょう(会津駒の東に小繫峠、鳩待峠の南に津奈木沢がある)。

「骨投沢」の由来、という標題は、私が文だけ書いて標題を付けなかったで、編集の際に山岳会で付けてくださったと記憶しています。

単身の山

砂田定夫

二月に雲竜谷を訪ねた。三十年ぶりである。矢板を朝発ては、日帰りできる。かつて夜通し歩いた林道だが、今正面に雪をまとった女峰・赤雉のパノラマを見ながら歩いている。やはり地の利というもの。その地の利で登ったいくつかの山々が頭をよぎる。

まず思い出すのは、栃木県北部から福島県を中心とした地域の、紅葉、新雪、残雪に彩られた静かな山々である。奥会津の荒海山、会津朝日岳、博士山、小野岳、大戸岳、三倉岳、三ツ岩岳、

高原山群の釈迦ヶ岳、男鹿山塊の日留賀岳など、かなり知られた山々であるのに誰とも出会うことなく、帝釈山、七ヶ岳、赤崩山、御神楽岳、志津倉岳などの山でも数人出会っただけの、いずれも静かな山を堪能した。大半が残雪期だったが、この時期になると気候も和らいで、山は美しく輝く。尾根の雪庇、亀裂、思わぬ深雪、沢のスノーブリッジや底雪崩のブロックなど変化に富んだフィールド、ときにはルートを見失ってパニックに陥ったりする緊張感、しかし山を下れば山麓を彩る芽吹き、新緑と山桜の祝福、たまらない充実感である。

気になる存在だった大佐飛山を一九九一年五月中旬によく果した。前年五月下旬に横川の奥へ男鹿川にそって車で入り、白滝沢林道を歩いて下見をしたが、途中数箇所崩壊があり、ひどく荒れていることを確認、上部は藪が予想されたので、本番は残雪を期待して五月中旬に実行した。白滝沢を離れ、作業林道に入ると予想以上に藪がうるさく、竹藪の密生した部分があって難儀した(一九七九年の記録を参考にしたが、そのような記述はなかった)。第一日は塩那道の下でツェルトを張り、同日中に男鹿岳を極める。翌日、目的の大佐飛山を往復した。かすかな踏み跡と赤布を目印としたが、無

海外の山

ムイスロフスキー
の提案

江本嘉伸

その電車の中でも、本や食べ物などの個人セールスが頻繁に現れるのが「市場経済」一色の今のモスクワの特徴だ。通路に立って朗々たる声で商品の宣伝をするロシアの男と女たち。時には金を乞う老人もいる。

この四月、六年ぶりに（ということは、ソ連崩壊後初めて）ロシアを訪れた際、アレクサンドル・ムイスロフスキーとの再会を果たした。一九八二年のソ連・エベレスト南西壁隊の第一次登頂者であり、ソ連山岳連盟会長をつとめた登山家である。山岳国際環境会議などで二度来日しているの、知る人は多いだろう。

森の周辺の散策を楽しみ、ペチカの前で乾杯したあと、ムイスロフスキーは「前に話した件だけど、ぜひ、日本の登山家たちと相談してみてくれ」と、一枚の紙を見せた。

「国際版登山用語集」というべき単語集のサンプルで、アルファベット順にたとえば「雪崩」にあたる単語が英、露、仏、独、伊、西各国語で書かれている。これに日本語を加え、必要に応じて欧州語のかわりに他のアジアの言語を入れてもいいのではないかと彼は説明した。

「山へ持っていくやすいように小冊子の形にして、ビジネスではないのだから、できるだけどの国の人も買やすいように定価は安くする。単語数も三百語から四百語程度とあまり増やさず、あくまで必要語だけにしたほうがいい」

技術大学の教授である彼は、車の修理からテレビの組み立てまで一人でやっていたのクラフトマンで、モスクワから五〇キロ離れた森の中のダーチャ（別荘）も、自分の手で作っていた。煉瓦作りのペチカで室内の暖房を確保するのは序の口で、敷地内の水脈のありそうな場所をハメートルほど掘り下げ、コンクリートのパイプを使って滑車式の井戸まで一人で作ってしまったほどである。

森を愛するロシア人の多くは、五月以降、九月頃までダーチャから市内の職場に通う。ガソリンが高いので電車を利用する者が多いのだが、

その電車の中でも、本や食べ物などの個人セールスが頻繁に現れるのが「市場経済」一色の今のモスクワの特徴だ。通路に立って朗々たる声で商品の宣伝をするロシアの男と女たち。時には金を乞う老人もいる。

森の周辺の散策を楽しみ、ペチカの前で乾杯したあと、ムイスロフスキーは「前に話した件だけど、ぜひ、日本の登山家たちと相談してみてくれ」と、一枚の紙を見せた。

三年前、国際山岳連盟総会が松本で開かれた際、数人の懇談の場でこの話が持ち上がった。居合わせた各国の代表は諸手をあげて賛成したが、実際にその仕事に着手した者はいなかったと思う。ただ一人ムイスロフスキーは、ロシアに帰ってから仲間たちとはかって、その最初のたたき台を作ったのである。

「山へ持っていくやすいように小冊子の形にして、ビジネスではないのだから、できるだけどの国の人も買やすいように定価は安くする。単語数も三百語から四百語程度とあまり増やさず、あくまで必要語だけにしたほうがいい」

サンクトペテルブルグで出会った学者たちのつましい暮らしぶりなど、インテリ層を含めたロシアの市民たちの経済窮乏を身近に確認した直後だけに、ムイスロフスキーの意気力と実行力には頭が下がった。

地味だが、いい仕事だと思う。この場を借りて、彼の提案を活かすさややかな共同作業を「九十周年記念」(無論、「九十一周年記念」でも構わないが)として、わが伝統ある日本山岳会が実行できないものか、提案させていただく。

名峰（一八六〇メートル）と大佐飛の上部の残雪で敷は少し軽減された反面、ルートをわかりにくくしているところもあった。いずれにしても手応えのある思い出に残る山だった。あれから四年経っているの、登路の状況は変わっているかもしれない。

ところで、会津の大沼郡昭和村にある御前ヶ岳は、以仁王の愛妃が一時身を隠したといういわれのある山だが、この山の標高は、国土地理院の地図では一二三三・一メートルであるのに、地元の観光資料や山頂の標識は一二三四メートルになっている。この山の北方にあり、同じ昭和村と三島町の境に位置する志津倉岳が一二三四メートルであるから、対抗して少し背伸びをしたのだろうか。

連峰縦走のような山行以外は、那須を起点に車を利用して東北の山の日帰りが可能だった。磐梯、吾妻、安達太良、燧などは余裕をもって日帰りでき、早朝発てば焼石、栗駒辺りまでが圏内だった。東京近辺の在住では思いつかないことだ。それ以北は長い連休を利用し、名山を遍歴した。

東北の山の佳さは数えあげればたくさんあるが、私の場合、ブナ、花、温泉の三つをあげる。たいていの山に美しいブナ林を見るが、やはり白神山地が思い浮かぶ。藤里駒ヶ岳の周辺で見

たブナ林は立派だった。太平山の秋田スギからブナへ移る様も印象に残る。

花の印象では飯豊連峰、特に北部の杵差岳は素晴らしかったし、鳥海山や早池峰では山名のついた花に巡りあえた。

それぞれの山行に思いがある。春の岩手山では、冬富士なみの強風に遭ったが、下山後、同日中に東にある姫神山に登って、暮れなずむ岩手山の大きな山容を眺め、先刻の雪煙舞う彼の山頂付近の光景に想いを馳せたひとときは忘れられない。

郷里の裏山といった感じの、阿武隈山系の低い山々も味がある。山間深くまで人々の営みを感じられる山地で、木漏れ日の中をのんびり歩くと心が和む。矢板に移ってから足を運んだ足利や安蘇にも一〇〇メートル未満ながら静かなたたずまいを見せる山があり、仙人ヶ岳や尾出山のようないくつかの奥深い山に巡りあえた。

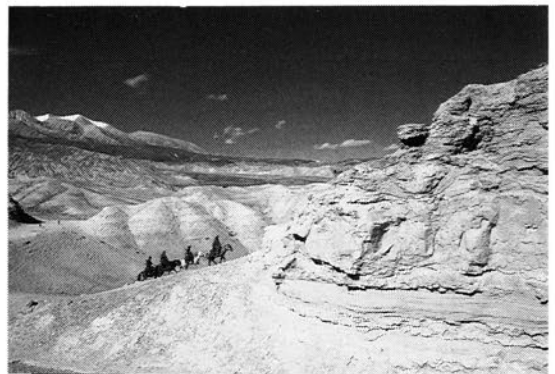
四月一日、矢板の象徴ともいえるべき八方ヶ原で「単身登山」を締めくくった。初夏になればレンゲツツジの咲き誇る高原は雪深く、ラッセルして剣ヶ峰の最高点に立ち、那須連山や男鹿山塊を眺めて感慨に浸った。東北や北関東の山々について触りを知った程度だが、豊かな自然が残る、静寂を保つ山がまだまだあることを知っただけでもありがたいことだと思っている。

ムスタンの旅・続

中村あや

十四日朝八時に村を出て、長い石ころ道を歩いて峠に着くと、百頭余りの山羊を連れた牧童に出会った。ほとんど草も生えていない乾いた大地だが、山羊が食べるだけの草はあるらしい。灰色や褐色の山が重なって見える、広い砂礫の道を行くと、ここにも大きなチョルテンがあった。その先に開けた草地があり、シートを敷いて昼食となる。からりと晴れた青空の下、山に囲まれた草地はのどかで心地好いが、高度のせいか皆あまり食欲がない。

その先は一段と広漠とした砂漠の道になり、やがてタルチョーを立てた石が門のように構える三九五〇メートルの峠に達する。眼下はるかに今回の目的地、ムスタン王国の都ローマンタンが見えた。拓けた耕地の中の一握りの村落である。月世界のような灰白色の道を降りて行くと、ゆるやかな斜面にポツリポツリと馬やロバが枯れ草を食み、遠くには雪をいただくチベット国境の山が連なり、広大な眺めだ。沢を渡り、ローマンタンの村に入り、子供たちの群がる中を通過してキャンプ地に着いた。頭痛、発熱、むくみなどの症状の人が出てきた。



ムスタン王国の都ローマンタンを見おろす3950mの峠

ら来た子供たちが一緒に暮らして勉強している。まだ幼い子供たちの姿も多かった。

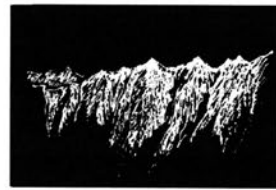
今日はたまたまネパールの総選挙の日で投票所も見せてもらったが、小学校の小さな庭にロープを張って、男女の絵表示で投票所を分けている。投票をすませた人たちは、脇の日だまりでのんびりと日向ぼっこだ。

午後はムスタンの王様への拝謁に赴く。途中、雑貨屋で白絹のカタ（スカーフのようなもの）を各自買い求めて王宮に入り、それを両手に捧げてナマステと挨拶すると、王様はそれを取って私たちの首に掛けてくださる。バター茶と揚げ菓子をいただきながら、サーダーの通訳でお話をし、記念撮影もさせていだいておいとまをした。

夕方一人でカメラとスケッチブックを持って散歩に出る。人なつこく集まってくる子供たち、村の中を自由に歩ける馬やロバ、家路につく山羊の群れ、大きなチョルテンや積み上げられたマニ石などを見ながら一巡し、道を外れ寒風の中に座って、荒涼とした白っぽい夕景をとっくりと味わってテントに戻った。

十六日、今日はテントを畳んで帰路につく。カゲベニから四日かけて登ってきた道を三日で降りる予定だ。今日

から二人、馬に乗る。国境の山を振り返り、名残を惜しみつつ峠を越える。選挙がすんで監視の任を終えて町に戻るポリスや役人、冬に備えて山を降り



カット 宇都木慎一

短歌

霧の彼方

―若くして逝ける岳友に捧げる―

大橋克也

瀧山りゅうざんのあの尾根を共に攀りしと

見舞いし友にそを言えぬ吾れ

病窓をふうわり叩く綿雪の

地に融けゆくか追えぬ臥す目は

あの尾根は未登なりきと髪抜けし

死病の友はさりげなく言う

あの尾根にまた挑もうと言えぬまま

抗癌剤の副作用に耐う

霧の彼方友の姿か羚羊か

まなこ光らせ嶺歩みおり

る村人らで、今日のコースは賑やかだ。夜はガミのロッジに泊まる。

十七日、今日からは四名が馬に乗ることになった。エクレバティでは、日なたの石に腰かけて、灌木が点々と生えているだけのあたりの風景を眺めながら、ポーターが作る昼食を待つ。じっとしていると寒いが、子供たちは裸足で飛び回り、家の前では、おばあさんがむしろに座って広げた穀類の選別をしている。

峠を越えた後、深くえぐれた谷を馬の一隊が逆落としのように下っていったが、後にはもうもうと土煙りが上がって、しばらく待たないと、とても下りて行けない。夜はサマルのアンナブルナ・ゲストハウスに泊まり、ヤクの肉や、舌がしびれるほど辛いダルスープなどを味見させてもらった。夕食の後、村の女性たちの唄と踊りを観る。私たちが払った一人百ルピーの見物料は道路の修理やお祭りの捧げものに使うという。翌朝サマルを出て、二時間でカリガンダキの河原に下りた。現在でも九割以上が鳥葬というこの国の主役である鷲が天空を舞っていた。カグベニのニルギリビユウ・ホテルに十三時二十分に着く。

これでムスタンの旅は終わり、明日からはそれぞれ別行動となるので、夜は隊の打ち上げ会。標高二九〇〇メー

トルに下ってきて、皆食欲も出て話はずむ。夕方、山から降りてきた村人の話によれば、サマルはもう雪になったということであった。

韓国の山名をめぐって

石田稔郎

一九九四年に発行された二冊の山書の中に、韓国の山名などに、間違った振り仮名を付したものがあつた。これは、韓国の山岳人に対して無礼な行為であり、山岳人同士の交流の障害ともなるので、正確な発音(読み方)に近しい振り仮名を紹介する。

まず、韓国北東部の軍事境界線に近く、日本で人気のある雪嶽山は、ソラクサンと読むことを多くの人が知っているが、ソラクサンとした書がある。ハングルは表音文字で、一語一語では雪はソル、嶽はアクであるが、ルの音が連音現象(リエゾン)でソラクと発音される。

ソウル(固有語なので漢字はない)近郊の北漢山(一語一語ではブクハンサン)は、プカンサンである。

中部にある俗離山は、ソクリサンではない。発音のルールはソンニサンである。

南部の済州島にある漢拏山は、ハン

ラサンと書く人が多いが(ある書にはカンダサンとしてあつた)、発音のルールはハルラサンである。その頂上の白鹿潭は、ペクノクタンではなくペンノタムと発音する。韓国人は語尾のKの音をほとんど発音しないように聞こえるので、城板岳はソンパンアクではなく、連音もあつてソンプナのように聞こえる。

うる覚えの山名などには、振り仮名を振らず、漢字だけを書くのが無難であるが、他の国の山でも、現地で発音されている山名、地名を忠実に伝えられることを望む。山名は大事なものである。

訂正とお詫び

田畑真一

私の不明により、会報五九八号東西南北欄「皇太子殿下と南アルプスの村」『芦安村誌』の原稿に事実の誤認がありました。謹んで訂正とお詫びを申し上げます。

・原文「献上ではない。あくまでも殿下からの声がかりによるものである」

・訂正「秋の園遊会で、殿下から北岳登山の折のことと村誌発刊についてのお話が望月義清村長に対してありました。望月村長が村誌に殿下の登山の記述が掲載してありますので、ぜひお読みいただきたいということでお届けをいたしました」

図書紹介



カット 中村あや

カフカス三題

カフカスに関する英文の書籍および地図三題が出版された。一つは英国人登山家の記録を中心にしたカフカス登山史。もう一つは中央カフカスの高峰登山(岩壁、氷壁登攀)のガイドブック。三つ目は五葉の山岳地図である。これら三種類のカフカス登山資料があれば、ヒマラヤやアルプスとはひと味も二味も違ったカフカスでの登山が身近なものになる。

1. Andrey Salkeld & Jose

Luis Bermudez 著

The Mountaineers(Seattle), 1993

ON THE EDGE OF EUROPE

-MOUNTAINEERING IN THE CAUCASUS

ヨーロッパアルプスのゴールデンエージが終わりを告げようとしていた時、英国人たちが次の初登頂の対象として選んだ山域の一つがカフカスである。フレッシュフィールドの一八六九年のエリブルース東峰とカズベクの初登頂

より、一九八六年のM・フォーラーらによるウシバ北峰の西壁直登ルート初登攀に至る英国人登山家を中心とする登山史が書かれている。章によって登山家の手記のオリジナルが掲載されている。それらのうち、ママリヤロングスタッフ、ハントなどの手記はわれわれにも馴染みがある。

カフカスはヨーロッパの登山家たちにとっては、十九世紀の末は初登頂、二十世紀の初めはヒマラヤへのトレッキング場でもあった。第二次大戦後は旧ソ連の登山家たちのバリエーションの時代であり、西側の登山家には一般にオープンされない時期が続いた。しかし近年、ようやく西側にもオープンされ、民族紛争が治まれば登山者も増えるだろう。

本書はヨーロッパの登山家たちのカフカス登山史を概観できる最初の本である。巻末には登山クロニクルや参考文献なども添えられ、参考になる。

一六〇ページ 二四・九五米ドル

2. A guide for mountaineers by

FRIEDRICH BENDER(edited from

an original translation by JILL

NEATE) Menasha Ridge Press(Ala-

bama) Diadem Books(London) 1992

CLASSIC CLIMBS IN THE CAUCASUS

同名のドイツ語版よりの翻訳である。

中央カフカスの八十本の登攀ルートが

紹介されていて、その範囲は西はエリブルースから東はカズベクまでの山域である。概念図、全ルート図、カラーおよび白黒写真も多く添えられている。クラシック・クライムと書名にはあるが、一部次のようなグレードの非常に困難なルートも紹介されている。

5A (TD/ED-) 5本(ミジルギ南稜等)

5B (TD+ED-) 11本(ウシバ北峰西壁等)

6 (ED+ED+) 1本(チャティン北壁)

西側で初めてのカフカス登攀ルート集で、原資料はA・ナウモフによってロシア語で書かれた五冊の登攀ルート集である。それらの書名は「バクサン」

「チェゲム・アディルスウ」「スワネチ

ヤの山」「中央カフカス」「カラウゴム・

ジゴリヤ・ツェイ」。旧ソ連では早く

から登攀競技が行われていたので、カ

フカスの山のほとんどすべてのバリエ

ーションルートのルート解説とグレー

ディングは完成している。

三一八ページ

3. カフカスの地図

① Teberda Region-Western Range

1 : 100000

② Mount Elbrus Region 1 : 80000

③ Bezingi-Sugan-Laboda Region

1 : 100000

④ Adai Khokh-Khalatsa-Kazbek

1 : 100000

⑤ Central Caucasus 1 : 200000

右記のうち⑤の中央カフカスは②③④の地図を一枚にしたもの。

EWP/WCP in the U.K. 1993

(田村俊介)

広島山稜会・編

『峠』創立三十五周年特集号

広島山稜会は、創立三十五周年を迎え、昨年十一月二十六日、記念誌『峠』(タオと読む)を発刊した。

三十五年の足跡を、草創期から飛躍発展、成熟期までの歩みとして、会報『峠』から抜粋集大成したものである。

内容は、十類に区分され、読み応えのある地域研究、考察、評論をはじめ、随筆、詩歌と多様で、よく整理された山行記録は特長的だ。

昭和三十七年に会員だけの労力奉仕で建設した「ひえばた小屋」を拠点に、未知なるものを求めて、芸北山群の山と谷を舞台に、地域研究に情熱を燃やしている内容は興味深い。詩人や文学、科学者など多彩な会員を擁し、故今西錦司氏とも交流があり、科学する心を育む場、あるいは自然観ともいえるべき視点で、山に取り組んでおり、優れた学術研究ともいえる書である。登山は、知性人格の向上を図るものとし、ハイセンスとエスプリを会のカラーにしたというだけのことはある。なお、こ

の会の中心的牽引者は、本会会員でもある桑原良敏氏である。

B5判 一一八六ページ 頒価一万円(送料五百円) 残部僅少

連絡先 千七三三 広島市西区三篠町一五〇六 野間弘(上中俊治)

W・ウエストン・著／三井嘉雄訳

『日本アルプス登攀日記』

ウエストン第一回来日期の一八九四年夏と秋、第三回来日期の一九二一、

一三、一四年夏の日記の翻訳である。

この日記は訳者と川村宏、安江安宣の三氏によって『山岳』に一九八七年

から四年にわたって掲載された「W・ウエストン年譜」でも精彩を放った。

保管していたACからコピーの特別許可を得て実現した訳業は実に頭の下がるもので、悪筆のウエストンのメモの

判読もさることながら、積年の調査研究に裏付けられた懇切な注記がありが

たい。訳本のある二つの日本の山関係の著書の該当部分と比べてみると面白

い。

根本清蔵と出会った妙義山の岩登りの記述を引用以外に日本語で読めるのも、本書が初めてではなからうか。

一九九五年二月 平凡社(東洋文庫)発行 三一八ページ 二千七百八十

円 (平井吉夫)

書籍受入報告 (1995年3月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
竹節作太	雲表の旅	272pp/19cm	朋文堂	1942	小野洗氏寄贈
千坂正郎	山の仲間	261pp/19cm	朋文堂	1993	小野洗氏寄贈
ナヴァラ(著)川崎竹一(訳)	禁断の山	250pp/19cm	河出書房新社	1958	小野洗氏寄贈
フリゾン・ロッシュ(著)近藤等(訳)	青春の水河 (La Grande Crevasse)	280pp/20cm	三笠書房	1956	小野洗氏寄贈
フリゾン・ロッシュ(著)瀬尾韶夫(訳)	青春の水河 (La Grande Crevasse)	309pp/19cm	朋文堂	1942	小野洗氏寄贈
蔵田延男	野帖余白	331pp/19cm	朋文堂	1941	小野洗氏寄贈
チンダル(著)三宅泰雄(訳)	水のすがた：雲・川・氷・氷河	247pp/19cm	創藝社	1949	小野洗氏寄贈
諏訪多栄蔵	アルピニズム入門	224pp/20cm	三笠書房	1957	小野洗氏寄贈
立岡洋二	ハケ岳遙か：野辺山だより	233pp/20cm	岳(ヌプリ)書房	1983	小野洗氏寄贈
太田繁	山里漫步	117pp/19cm	太田繁(私家版)	1979	小野洗氏寄贈
黒田初子	山への誘い：女性のための登山読本	238pp/19cm	ダヴィッド社	1957	小野洗氏寄贈
坂部護郎	最後の蠟燭	224pp/19cm	朋文堂	1938	小野洗氏寄贈
袋一平	霧水圏：山の随筆	304pp/19cm	岡倉書房	1941	小野洗氏寄贈
早坂敬二郎	長き尾根の果てに：早坂敬二郎遺稿集	147pp/27cm	東京農業大学山岳部	1905	小野洗氏寄贈
自然環境研究センター(編)	新・美しい自然公園(第12巻)：日光国立公園「奥日光」	48pp/34cm	自然公園美化管理財団	1995	発行社寄贈
庄司雅昭	香港低山散歩：庄司雅昭のプライベート・ガイド	174pp/12cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
鈴木庸夫(写真)	山溪ポケット図鑑(第1巻)：春の花(野草・樹木・園芸植物)	767pp/17cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
平塚市中央図書館(編)	柿沢篤太郎山岳図書コレクション目録(平塚市中央図書館蔵書)	87pp/29cm	平塚市中央図書館	1995	発行者寄贈
いがりまさし(写真)	野の花の小径(写真集)	66pp/26cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
小松健一	ムスタンの真実：NHK「やらせ」現場からの証言	230pp/20cm	リベルタ出版	1994	堀内章雄氏寄贈
内田正明	メスとビッケル：日本アルプス警察医の記録	282pp/19cm	金剛出版	1967	内田二葉氏寄贈
内田正明	続・メスとビッケル：日本アルプス警察医の記録	211pp/20cm	近代文藝社	1982	内田二葉氏寄贈
大阪営林局(編)	高山と高山植物：日本中部	397pp/26cm	大阪毎日新聞社	1937	村上健助氏寄贈
Bonington, Chris(編)	Heroic Climbs: A Celebration of World Mountaineering	224pp/30cm	The Mountaineers	1994	購入
Whittaker, Low 他	Lou Whittaker: Memoirs of a Mountain Guide	271pp/24cm	The Mountaineers	1994	購入
Diemberger, Kurt	Spirits of the Air	304pp/25cm	The Mountaineers	1994	購入
Holgate, William	Arka Tagh: The Mysterious Mountains	154pp/23cm	The Ernest Press	1994	購入
Rolston, Holmes	No Place to Fall: Superalpinism in the High Himalaya	175pp/25cm	Hodder & Stoughton	1994	購入
Karl Eugen von Ujfalvy	Aus Dem Westlichen Himalaya	330pp/24cm	Brockhaus	1884	購入
Colonel Schomberg	Peaks and Plains of Central Asia	288pp/23cm	Martin Hopkinson	1933	購入
Eric Teichman	Travels of a Consular Officer in North-West China	219pp/25cm	Cambridge Univ. Press	1921	購入
N.Prjevalski	Mongolie et Pays des Tangoutes	344pp/25cm	Librairie Hachette	1880	購入
Georges Appert	Un Coin du Japon: La Province de Hida	31pp/26cm	Institut Geographique	1890	購入

山と医療・中島道郎

1994年制定 UIAA 医療委員会公認基準 (その5)より

登山と栄養

どの栄養素が重要か?

炭水化物(糖質) [米飯、小麦粉製品、いも、果物、野菜類、砂糖製品、卵パスタ、ビスケット、チョコレート等々] は、登山行為に最も重要なエネルギー源である。これらの食品から得られるエネルギーは、脂肪から得られるものの3倍早く放出され、しかも酸素消費量はずっと少なくすむ。摂取カロリーの約半分(50~60%)は炭水化物から摂る。登山行動が安定して持続するように、それを2時間ごとに食べる。

脂肪 重要な栄養源ではあるけれども、エネルギー供給源としては効率が悪い。脂肪から摂るカロリーは、全体の30~35%以下に押さえる。

タンパク質 [肉、卵、牛乳、チーズ、若干の野菜、果物等] は同じく登山行為には重要な食品である。動物性タンパク質と植物性タンパク質はバランスよく摂取すること。タンパク質からのカロリー摂取率は10~12%に。

ビタミン類 からだの働きを調節し、病気から身を守るためになくはならない食品であるが、これは、新鮮な食品と一緒に摂取すべき性質のものである。したがって、定期的にビタミン錠を飲むということは、ビタミン欠乏食が何週間も続くといった、長期遠征など、食品のバランスがよほど崩れたとき以外は不要である。

水 スポーツする個体にとって、構築材であり、溶剤であり、輸送媒体であり、熱制御物質であるという、極めて重要な役割をもった物質である。

寒冷・高所における発汗と激しい呼吸は1時間に2リットルもの水分喪失をきたすことがある。この水分喪失分は補充しないと、いけない。さもないと、血液は濃縮されてしまう。

水分は、尿、便、汗、呼吸中水蒸気形で失われるが、下痢(1日最高8リットル)とか、重症高山病の場合は、嘔吐の形で大量に失われることがあることを忘れてはならない。

すべての水分喪失は血液濃縮につながる。したがって、それはできるだけ防止しなければならない。でなければ、人は以下のごとき極めて危険な状態におかれることになる: 早期疲労、困憊、凍傷、血栓症、血栓塞栓症、尿路結石

無機塩類(ミネラル) 骨、歯、ホルモン、酵素、ヘモグロビン、および細胞の構築材としてとくに大事な物質である。そして体液中にあっては『電解質』となり、生化学的輸送手段という重要な役割を演じる。電解質は常に水と一緒に存在している。

登山において無機塩類を規則正しく摂取することはとくに大切である。しかし、だからといって、それを特別なミネラル供給食品・飲料(例えば、ミネラル錠、ミネラル・ドリンク)の形で取る必要は全くない。通常のバランスの取れた食品には、十分量のミネラルが含まれている。

線維性食品と食欲増進食品

線維性食品 本来の消化を十分に行うためには非常に大切なものである。(記者註: 線維性食品とは、腸から消化吸収されない食品成分の総称と定義される。栄養的価値は全くないが、腸を刺激して、便通を整える作用があり、それには1日最低6gは必要とされる)

食欲増進食品 しばしば不当に落ち込んだ食欲を増進させる作用

を持つ。特に高所では、ものの味が変わったり美味しくなくなったりする。これはそういう時に役に立つ。(記者註: 例えば塩昆布とか梅干しのような、これがあれば何とか物が食べられる、といった食品のことである。登山には絶対必要で、量はいらぬが、種類はある方がよい)

ものすごく大量の汗をかいて疲労困憊に達した場合、その失われた水分と糖質を完全に補うには、少なくとも24時間から36時間はかかると思われるべきである。

登山における正しい
飲食方法について

*変化に富んだ、想像力豊かな食糧計画。

*濃縮食品、あるいは極端な偏食(例えば厳重な菜食主義のごとき)は避ける。普段食べている複合炭水化物を主としたものを。

*出発前: ゆったりと落ち着いた気分での朝食をたっぷりの水分とともに。

*行動中: 最低2時間に一度は小休止を取り、その休憩中に飲んだり食べたりする。アルコールはいけない。

*行動終了直後: 少量のスナック(軽食)と多量の水分を。

*その日の一番大事な食事: 行動終了1時間後に、実質的でゆったりした食事を多量の水分とともに。

UIAA医療委員会は、ビタミン類、Lカルニチン、微量元素、ブドウ糖錠、小麦胚芽、蜂蜜、ローヤルゼリー、ヒマワリの実、電解質強化飲料といった製品が、何か特別な精力源的な価値を持つものだとは認めない。また同じくアルコールについても、それはカロリーの足しになるとか、筋肉の凝りをほぐすとか、体を温めるとか、あるいはそれで元気が出るとか、そういう考えには与しない。

会務報告

■三月定例理事会

日時 三月十六日(木) 十八時四十分～

二十一時十分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】中村副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、南川、伊藤、南井、堀井、溝口、中川、大谷各理事、中島、川崎各監事、湯浅、西村各常任評議員

【委任】藤平会長、片岡、松浦、水野、渡邊、山本各理事、斎藤、宮下、神崎、重廣各常任評議員

議事に先立ち、去る二月二十一日マカルー登山隊と共にキャラバン中の藤平会長が途中のカンパ・ラで突風のたため転倒、左股骨頭基底部骨折の負傷をし、急遽帰国。三月八日厚木病院にて手術し、現在治療中である、と報告された。三月十四日中村副会長、小倉、大倉、村井各常務理事が見舞いに訪問したが、経過は良好。会長は会務を停滞することなく、運営に当たってほしいと要望された。

議事

【審議事項】

一、秩父宮記念博物館より、貸し出し展示品などの期間延長の件 小倉

平成七年四月一日より平成八年三月三十一日まで一年間の期間延長を要請

された。

二、伯耆国山岳博物館より本会收藏絵画の貸し出し要請の件 小倉

四月三十日より六月十七日まで、日本山岳会九十周年記念マカルー峰登山支援の美術展として開催する、として

①収益の一部を寄付する。②輸送に係わる経費は博物館が負担する。その他として、①日本山岳会グッズ販売代理店となること(本部より委託を受け、西日本地域JACC会員の便宜を図り、収益事業に貢献したい。取扱品などは本部に一任する)、②スケッチクラブ年次展の西日本地域における巡回紹介展を山岳博物館で開催させてほしいなど。

三、エベレスト(チョモランマ、サガルマタ)ウイメンズ・サミット一九九五年の件 小倉

六月二十三日(金)二十八日(内)、エベレスト女性初登頂二十周年記念シンポジウムと富士山清掃登山に対して、本会に名義後援が要請された。 承認

四、平成七年度総会提出議案の件

(1)平成六年度事業報告 小倉

(2)平成七年度事業計画(案) 小倉

(3)平成七年度収支予算(案) 大倉

(4)定款改正(年会費・入会金) 大倉

(5)組織の見直し 中村副会長

前回審議の提案に対する取りまとめ

案の修正案審議の結果、委員会の現在

数を維持。構成の部分で、常任委員六〇七名を常任委員若干名とするなど一部修正して次回理事会に提出する。

(6)定款改正に伴う細則改定 小倉

五、登山隊の後援要請の件 承認

日本山岳会一九九六K2(チョゴリ)登山隊(青年部)への名義後援の要請 承認

六、マカルー峰登山隊に伴う理事の担当代行の件 村井

平成七年六月まで、高所登山研究委員会担当・渡邊理事、学生指導委員会担当・山本理事(いずれもマカルー登山隊参加)の職務を、指導対策委員会担当・片岡理事が代行する。 承認

【報告事項】

一、マカルー峰登山隊一九九五より、三月十六日の報告(内容は四月号三ページに掲載) 村井

三月中に、中国に対して二百万円の支出をするが、本会からの仮払いとする。 大倉

二、九十周年合同募金の現況(三月十六日現在) 小倉

・会員募金 七百四十名 二二三・一八口 千六百六十六万四千円

・企業募金 四十九社 八百四十三万四

三、支部名の英語表示 中川

これまでは、ローカル・セクション、あるいはランチとまちまちであったが、二月の支部事務局担当者会議でも話題となり、今後はランチ＝BRANCHに統一する。

四、「山」の広告募集 伊藤

【委員会報告】

●資料委員会 新潟県上越市立「日本スキー発祥資料館」へ、故広瀬潔名誉会員寄贈の「古代スキー」を一月末寄託したが、二月十二日、第一回「レルヒ祭」が上越市の主催で開催、寄託品も展示された。山口理事出席。

●フィルムビデオ委員会 二月十七日一六ミリ映画会を開催。花嫁の峰「チ

多彩なクルマ、多才なサービス。



東京トヨペット
千代田営業所

☎3256-5351 〒101 千代田区内神田2-1-4

今年もさくせんで会いましょう

ヨグリザ」他一篇、約三十名出席。

●青年部 三月一日、シート・チュチュラ峰登山隊の壮行会をルームで開催。

●自然保護専門委員会 ①二月十三日「山の自然学講座」で育った活動者の集まり、「山の自然学研究会」発会の集まりを持った。②三月五日「山の自然学講座」活動の一つ、丹沢の酸性雪(雨・霧)の調査第一回として、松洞丸へ行き、約三十か所のデータを採取、参加者十名。③三月十一日蔵前工業会館で第二十七回「山の自然学講座」の講義。講師・小野有五、参加者五十名。

●集会委員会 ①四月九日、新入会員のためのサクラ・ハイク。弘法山と鶴巻温泉・陣屋で懇親会。②六月十日、十一日第十九回若葉会山行、越後・守門岳、禿岳。

●総務委員会 ①二月二十五日、二十六日、水道橋グリーンホテルで第二回青年登山者懇談会、支部事務局担当報告と日本山岳会に対する要望。ゲストは日本勤労者山岳連盟・山本辰平氏、日本ヒマラヤ協会・山森欣一氏、東京都山岳連盟・宮地由文氏。②三月十八日十四時からルームで新入会員のためのオリエンテーション、新入会員三十名参加。③五月二十日、水道橋グリーンホテルで支部長会議・日本山岳会総会開催の予定。

●日本山岳会創立九十周年記念「ブロック別式典」日程表

一九九五年
六月十七日(土)十八日(日)
九州ブロック・九重山
七月八日(土)九日(日)
京都・岐阜ブロック
八月二十六日(土)二十七日(日)
中部ブロック・編笠山・仙丈岳
九月九日(土)十日(日)
東北ブロック・姫神山
マカール講演会・盛岡
十月十四日(土)
本部・新高輪プリンスホテル
十月二十一日(土)二十二日(日)
北陸ブロック・石川医王山
マカール講演会
十一月十一日(土)
北海道ブロック・札幌
マカール講演会
一九九六年
一月二十日(土)二十一日(日)
東海ブロック

●会員異動

▼物故
名児耶達男(六〇七五) 6・12・15
小松善弥(二二六八) 6・12・19
伊達忠雄(二四八一) 7・2・2
辰沼廣吉(一九五三) 7・2・12
加藤悦宏(一一八三五) 7・3・6
布施徳馬(七六四三) 7・3・14
小塩丘平(五九九四) 7・3・17
松下 肇(五八六七) 7・3・23
権藤太郎(二〇三七) 7・3・29

▼退会
川本章光(八三三〇) 7・3・18
若山洋子(九〇九七) 7・3・31
篠崎長滋(六一三五) 7・3・31
三好司二(六〇八九) 7・3・31
小竹 龍(六七二三) 7・3・31
藤田 博(四五五七) 7・3・31
藤本 亨(二〇八一) 7・3・31
楠本陽子(二〇一一) 7・3・31

▼終身会員
福田光子(七五八五) 7・3・3
添田啓一(五六九七) 7・3・3
佐々木幸作(二九七七) 7・3・31

▼改姓
鈴木実穂(二〇九四) ↓磯部実穂

一月二十七日(土)二十八日(日)
関西・山陰ブロック
*阪神大震災により、関西支部開催を危ぶまれていたが、支部員の熱意により開催することになった。

3月
1日 青年部 遭難対策委員会 データバンク委員会
2日 自然保護専門委員会
3日 山の自然学クラブ
6日 募金委員会 連絡委員会
7日 図書委員会 アルパインスケッチクラブ
8日 山の自然学クラブ
9日 フォトビデオクラブ 青年部
11日 自然保護専門委員会
12日 アルパインスキークラブ アルパインスケッチクラブ 図書委員会
14日 二火会 指導委員会
15日 三水会
16日 評議員会 理事会
22日 遭難対策委員会 アルパインスキークラブ
23日 科学研究委員会 自然保護専門委員会
24日 総務委員会
27日 集会委員会 資料委員会
28日 自然保護委員会 フィルムビデオ委員会
29日 常務理事会
30日 学生部

ルーム日誌

3月	青年部 遭難対策委員会 データバンク委員会
1日	自然保護専門委員会
2日	山の自然学クラブ
3日	募金委員会 連絡委員会
6日	図書委員会 アルパインスケッチクラブ
7日	山の自然学クラブ
8日	フォトビデオクラブ 青年部
9日	自然保護専門委員会
11日	アルパインスキークラブ アルパインスケッチクラブ 図書委員会
12日	二火会 指導委員会
14日	三水会
15日	評議員会 理事会
16日	遭難対策委員会 アルパインスキークラブ
22日	科学研究委員会 自然保護専門委員会
23日	総務委員会
24日	集会委員会 資料委員会
27日	自然保護委員会 フィルムビデオ委員会
28日	常務理事会
29日	学生部
30日	3月来室者545名

INFORMATION



◆初夏の高尾山を写そう

フィルムビデオ委員会
第六回写真撮影教室・ハイキングを、
同好会アルパインフォトビデオクラブ
との共催で行います。

日時 七月二日(日)

場所 八王子市郊外・高尾山一帯

集合 京王帝都電鉄高尾山口駅・改札

口前 九時三十分(JACの旗

あり)雨天中止

持物 カメラ(使い慣れたもの)、弁

当、ハイキングスタイルで

申込 葉書で六月二十五日までにフイ

ルムビデオ委員会まで

◆スキー力学講演会―スキーロボット

実演によるシミュレーション―

科学委員会

スキーロボットによるシミュレー

ションで、スキー力学を分かりやすく

解説します。山スキーで問題になる兼

用靴とスキー靴の得失についての貴重

な示唆が得られるのでは?

日時 七月七日(金) 十九時から

場所 日本山岳会集会所

講師 尾原啄夫氏(スキー科学研究会)

◆講演・懇談会のお知らせ

94年度同期会

第一回の講演・懇談会を開催します。

日時 六月二十九日(木) 十八時三十分

場所 日本山岳会集会所

講師 松田宏也氏(同期会会員)

演題 山で極限状態を克服する

申込 葉書に第一回94同期会申込と表

記。会員番号、住所、氏名、電

話・FAX番号を記し、日本山岳会

事務局94同期会宛。四十名まで

◆「奥美濃大日ヶ岳」探索山行案内

科学委員会・岐阜支部

九月三十日(土)に岐阜県郡上郡高鷲村

「ホテル・ホワイトキャッスル」に宿

泊し、十月一日(日)に山行を実施いたし

ます。詳細は、会報六月号に掲載しま

す。なお、講演は大内幸雄会員による

「奥美濃の植物」を予定しています。

◆中垣淑子・山のスケッチ展

山と野の花の水彩画約四十点を展示

日時 六月二十七日(火)〜七月九日(日)

十時三十分〜十七時(最終日は

十六時)月曜休館

場所 嫁菜の花美術館(JR中野駅北

口バス③野方行き乗車・野方警

察前下車)TEL〇三三三三八七

七七七七 入館料三百円

創立90周年記念事業募金応募状況 (1995年4月7日現在)

(累計788人 2,444,8口 12,224,000円)

●20口(100,000円)

今西壽雄(計40口)

●6口(30,000円)

宮川良雄 南川金一 山本良三
前田宗寿

●4口(20,000円)

戸谷全男 村田数之亮(計6口)
吉田宏 遠田栄

●3口(15,000円)

鳥居寿興 金澤守恭 小幡二郎

●2口(10,000円)

誉田紘八郎 相山之良 篠田勝
行 大屋梯二 金山淳二 高橋
詢 梅本実 金子泰助 齊藤桂
小田和友蔵 内藤順造 塩原国
隆 木村桂 利部輝雄 岩館公
子 今野實 渡辺健二 森友彦
七郎 里見清子 森武昭 國見
利夫 渋谷千秋 佐々木誠 山
田和男 坂井真 古谷聖司 大

久保泰司 榎本進 大久保春美

須藤節子 山下松司 清瀬祐司

櫻井善志 蓬田時男 蓬田三枝

子 松村文子 菊池修身 島田

秀夫 田中昭男 藤田友生

●1口(5,000円)

水村通子 仕名野完治 川端浩

文 松永忠則 山本俊雄 辻寅

吉 能谷隆俊 三ツ石清

■訂正 三月号一四ページ・募金応募
状況の多須川治を名須川治に、四月号
一ページ三段目NakaguraをNaga
kuraに訂正いたします。

◆編集後記◆

会報「山」六〇〇号の企画は、さる
二月二十二日、ルームで開催した「編
集懇談会」での意見から生まれたも
のです。望月、織内、岡澤の諸先輩に
リレー式に六〇〇号の足どりを回顧し
ていただき、最後に現編集担当が将来
を展望する、ということでした。

トップの特集記事はご覧のとおりで
す。『よりよい会報をめざして』進み
たいと思いますので、さらなるご支援
のほどをお願い申し上げます。

会報六〇〇号発刊に際して、五五一
〜六〇〇号の分類別目録を作成するこ
ととし、小倉厚委員をわずらわしまし
た。これは6月号の付録としてお届け
いたします。(伊藤 敬)

日本山岳会会報 山 600号

1995年(平成7年)5月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 藤平正夫

編集人 伊藤 敬

印刷 株式会社 双陽社